

〈特集〉

中世東国史料の世界

本誌前号（『史友』五七、二〇二五年）において、『書札次第』の翻刻と紹介を行った。同史料は中世後期東国（古河公方関係）の書札札を含む新出史料であり、今後の活用が大きい期待されるものである。そこで本号では、「中世東国史料の世界」と銘打って、『書札次第』をはじめ多様・多彩な史料から、新たな中世東国論を展開していく特集を組むことにした。

劈頭を飾るのは、これまで中世東国史研究を牽引してきた大家・佐藤博信の論考である。佐藤は千葉県富津市の安国寺に存在する不動明王坐像銘に注目。その厳密な読みを通して、鎌倉と房総をつなぐ仏師の活動を浮かび上がらせる。佐藤は政治・経済・社会・文化と多岐にわたり分厚い東国史叙述を展開してきたが、本稿もまたそのような良質な成果となつて

いる。続けて、その安国寺を訪問したときの記録を、外山信司にお願いした。安国寺のある上総国佐貫は東国史では有名な地域であり、実際に現地を見学することで理解は確実に深まったといつてよい。貴重な機会を与えて下さった安国寺御住職に改めて御礼申し上げる。

次に、『書札次第』に正面から取り組んだものとして、安田健人の論考を収めた。安田は『書札次第』とそれ以外の古河公方足利氏の書札札書を比較検討することで、『書札次第』にあるもの、逆にそこにはないものなどを丁寧に指摘する。本稿は『書札次第』の基礎的考察といつてよいもので、今後の公方・足利氏研究に資するものとなつていよう。同様に、堀内誠司は『書札次第』に見える「早々謹言」という、やや珍しい書止文言一点に着目。類例を諸史料（中世・近世）から

谷 口 雄 太

可能な限り網羅的に検出することで、それが一体いかなるものかについて着実に迫ったものとなっている。近世史を専門とする堀内の視点と力量が冴える。

さらに、吉田勝弥は自身の研究テーマである上杉氏の視角から、『書札次第』とそれ以外の書札礼書、さらには実際の文書などを手堅く分析する。上記安田の論考とともに、『書札次第』や東国史を立体的に理解するのに役立つ内容となっている。また、伊藤拓也も自身のフィールドである北条氏の視座から、同氏が『書札次第』には見えない点も含めて、戦国期東国における北条氏の位置付けを追う。北条改姓の構想を早雲（宗瑞）の段階とするなど、意欲的な仮説や提言が目立つ。研究者の応答が待たれよう。最後に、鈴木清は自身の領域である武蔵国世田谷・吉良氏の観点から、熊野との関係を考究する。半世紀前（一九六二年）の『新修世田谷区史』段階の良質な研究を踏まえて、実に様々な知見を提出しているのだが、鈴木も厳しく指摘しているように、この間の世田谷区の研究レベルの停滞・頹廢には啞然とするほかに、東国史・日本史研究の汚点として名を刻んだ世田谷区史編纂問題も、起こるべくして起こった事件であったといわねばなるまい。かかる愚を二度と繰り返さないためにも、上記のような筋の通った誠実な研究（および、研究者）が求められているのである。

本特集がそうした再出発となり、かつ、足利氏・上杉氏・北条氏・吉良氏をはじめとする東国諸氏、さらには、鎌倉や房総などの東国諸地域の研究のさらなる発展に寄与することを祈念して、冒頭の言葉にかえたい。なお、本特集は、青山学院大学大学院の日本中世史ゼミ（二〇二五年度日本史演習・日本史特殊演習ⅡA・ⅡB）の成果を基本とするものである。